

第3章 西坪上高尾原遺跡の調査成果

第1節 遺跡の概要

1 遺跡の立地(第5・6図、PL.1・2)

西坪上高尾原遺跡は、大山北麓に派生する丘陵上に所在する。これらの丘陵は、大山山系から流れ出る多数の中小河川によって侵食を受け、放射状に開析されたことにより形成されたものである。調査地の標高は約50~55mで、北方の日本海へ向け緩やかに傾斜する。一方、丘陵の東西は急峻な谷地形を呈する。調査地は狭小な丘陵上に立地するため、1区の西側、2区の東側は急勾配となる。谷を挟んだ西隣の丘陵上には名和中畝遺跡が所在する。

調査前の状況は雑木林である。調査地のほぼ中央をとる私道から東側、西坪下馬駄ヶ峰遺跡までの間は後世の開発により大きく削平を受けている。先述した2区東側の谷は、2区を境に南側は埋め立てられ、一帯は平坦に整地されている。かつては養豚場として使用されていたとのことである。

2 基本層序(第7図、PL.11・12)

調査地内の堆積は、各区に土層確認用のベルトもしくはトレンチを設定し(第7図)、基本層序の記録を行った。以下にその概要を示す。

1区

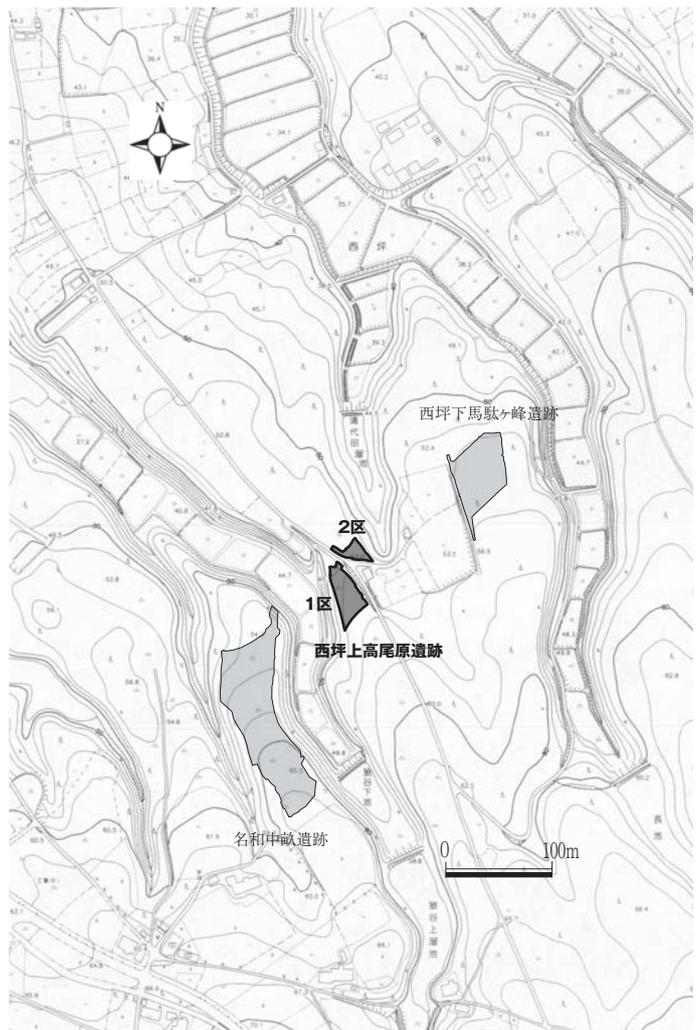
表土は調査区全体に10cm程度薄く堆積する。樹木の根による攪乱、土壌化が著しく、下層から巻き上げられた黒曜石片等の遺物が出土する。

a層：褐色土(10YR4/4)。表土下に堆積する。

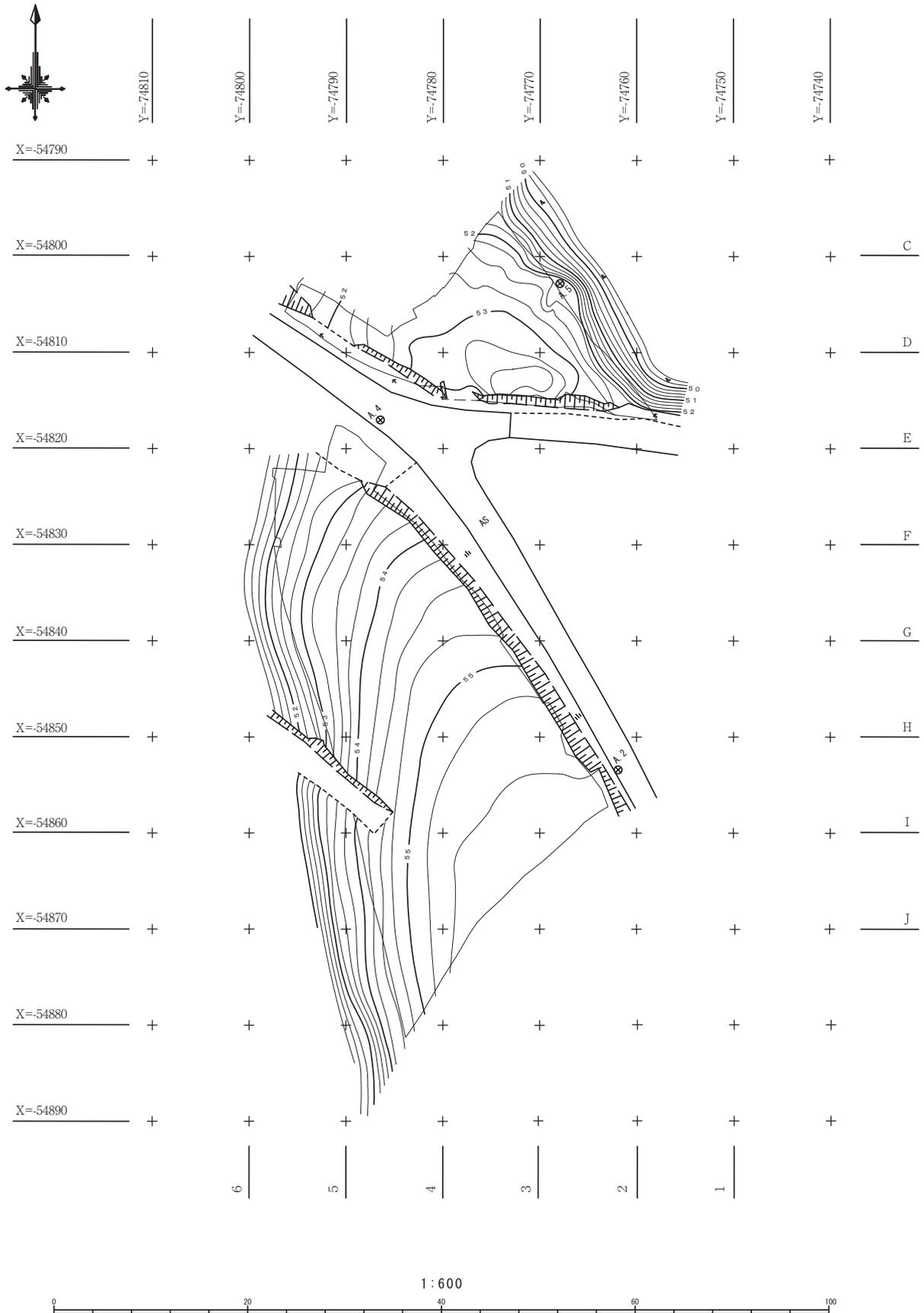
第6図における概ねFライン以南に堆積し、調査区北側、北西側では流失のためか確認できない。この層の上面と下面(I層上面)はそれぞれ遺構検出面となった。黒曜石片をはじめとする非常に多数の遺物を包含する。

b層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)。西側斜面部に堆積。I層由来の流土か。黒曜石片等、遺物を若干包含する。

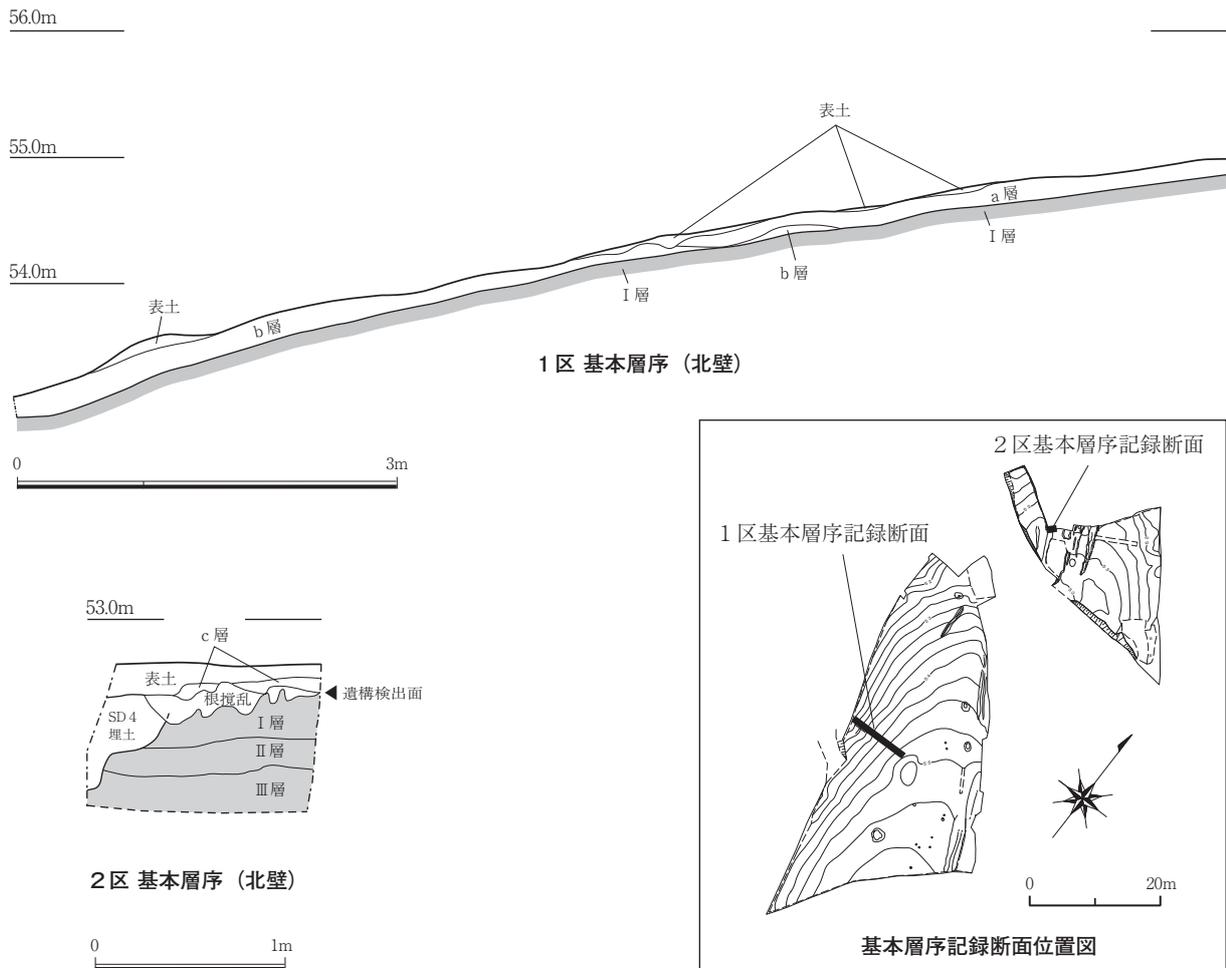
I層：明褐色土(7.5YR5/6)。a層及びb層下に堆積するローム層。極所的だが、この層の下に始良Tn火山灰(AT)由来の二次堆積層と思われる土層を確認している。



第5図 調査地周辺の地形



第6図 調査前地形測量図



第7図 基本層序

2区

表土は10～20cm程度堆積し、著しく土壌化している。

c層：褐色土(10YR4/4)。表土下に薄く堆積する。比較的削平の少ないC4グリッド付近で確認できる。1区のa層に色調が近似するが、土壌化が著しく詳細は不明である。

I層：明褐色土(7.5YR5/6)。橙色を呈するローム層。1区と同様、この層の下に始良Tn火山灰に由来する二次的な堆積を確認しているが、安定した堆積ではない。

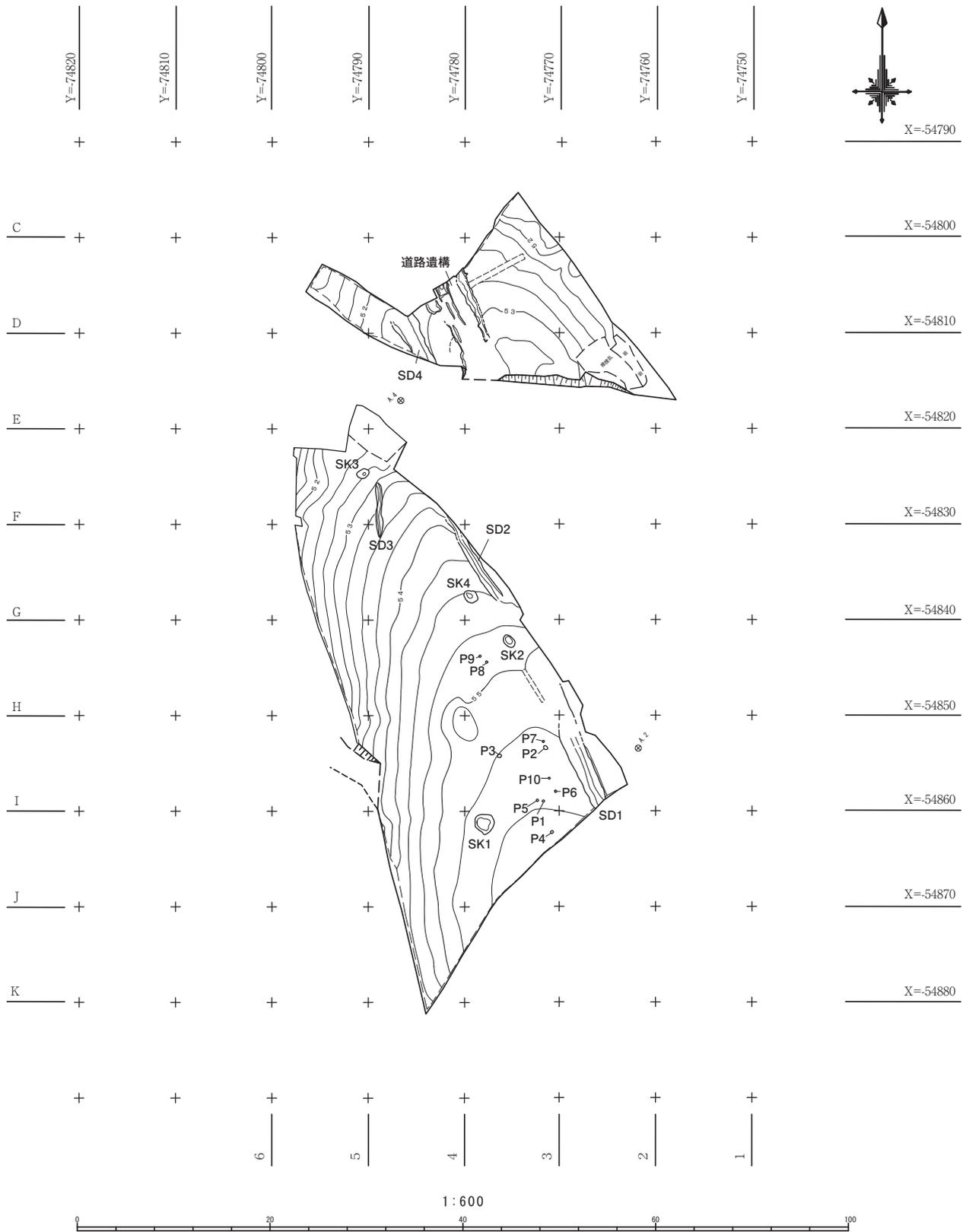
II層：にぶい黄橙色土(10YR7/3)。乳白色を呈するローム層。

III層：にぶい黄橙色土(10YR6/4)。岩盤由来の小礫を若干含むローム層。

3 調査の概要(第8図)

西坪上高尾原遺跡では、1区から黒曜石製を主体とする多数の石器が出土した。これらの石器群は、共伴する土器から縄文時代早期末～前期初頭に帰属する。大きさ1cm程度の剥片や5mm以下の碎片の出土が目立ち、石器器種では石鏃が卓越する。失敗品や未成品を含むことから当地で石鏃を中心とした石器製作がおこなわれていたことが判明した。2区は後世の削平を著しく受けていることもあるが、黒曜石等石器の出土数は若干数に止まる。

遺構は、溝4条、土坑4基、ピット10基、道路遺構1基を確認したが、先述した石器群との関係性が明白な遺構は無い。その他では古代に帰属する土器片が少数ながら出土している。



第8図 遺構配置図

表1 遺構名新旧対照表

新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
SD 1	SD 1	SD 4	SD 7	SK 1	SK 1	SK 4	SK 4	P 3	P 3	P 6	P 6	P 9	P 9
SD 2	SD 2	道路遺構	道路状遺構 (SD 4 ~ 6)	SK 2	SK 2	P 1	P 1	P 4	P 4	P 7	P 7	P 10	P 10
SD 3	SD 3			SK 3	SK 3	P 2	P 2	P 5	P 5	P 8	P 8		

第2節 遺構

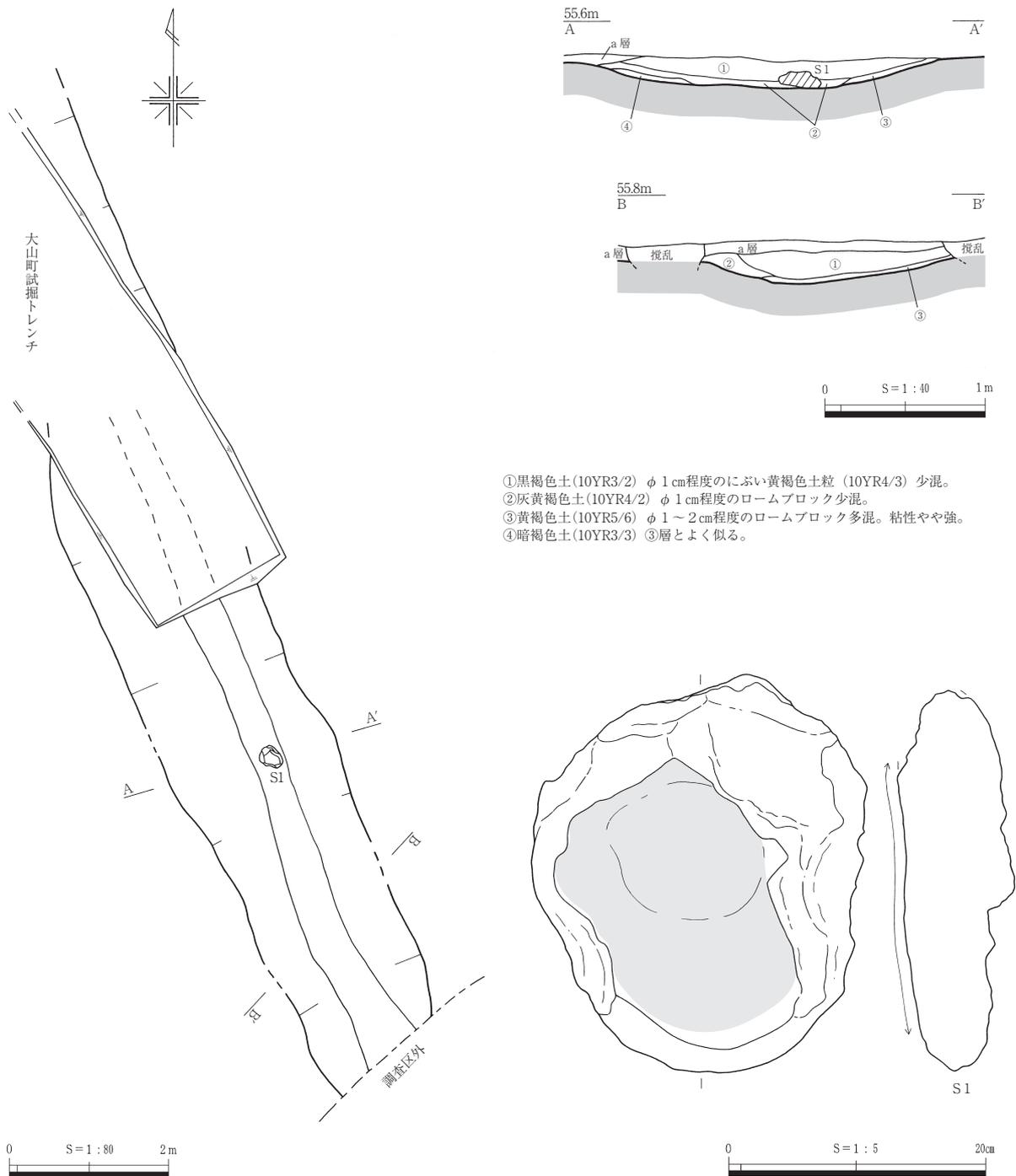
1 溝

SD1 (第9図、PL.6・7・17)

1区G2・H3グリッド、標高55.3m付近に位置する。a層下、I層上面で検出した。

直線的に南東から北西に向かって延び調査区外へ続くため、全体の様相は不明であるが、検出した範囲での規模は、長さ12.6m、最大幅2.6m、深さは約20cmを測り、断面形は皿状を呈す。

遺物は、底面から台石(S1)が出土したほか、埋土中からは黒曜石製石器、縄文土器片が出土した。



第9図 SD1 及び出土遺物

本遺構がa層下から掘り込まれている点、底面にて台石(S1)が出土した点を考慮すると、本遺構の帰属する時期は、石器群と同様に縄文時代早期末～前期初頭に遡る可能性がある。流水の痕跡や底面の硬化などは認められず、本遺構の性格については不明である。

SD2(第10図、PL.7・8)

1区F3グリッド、標高54～54.5m付近に位置する。表土下、a層上面で検出した。

尾根上を南東から北西方向へ直線的に延びるが、北側は調査区外へ続いている。検出した規模は、長さ9.6m、最大幅1m、深さ約20cmを測り、掘方の断面形は逆台形状を呈す。

埋土は炭化物を多く含む黒褐色土(①層)を主体とし、褐色土(②・③層)が下層にわずかに堆積する。

遺物は、周囲からの流れ込みと思われる黒曜石製石器の他、底面から須恵器が1点出土している。小片のため図化できていないが、無高台坏の底部とみられ、本遺構の廃絶時期は古代以降と考える。流水の痕跡や底面の硬化などは認められず、遺構の性格は不明である。

SD3(第11図、PL.8)

1区E4・F4グリッド、標高53～53.5mにかけて検出した。表土下、I層上面で検出した。

検出した規模は、長さ5.6m、最大幅0.7m、深さ約8cmを測り、掘方の断面形は浅い皿状を呈す。

埋土中からは黒曜石製石器が出土したが、本遺構との関連については不明である。流水の痕跡や底面の硬化などは認められず、遺構の性格も不明である。

SD4(第12図、PL.12)

2区C4・D4グリッドに位置し、周辺の標高は約52.5mである。表土下、I層上面で検出した。

規模は、最大幅2.5m、検出面からの深さは28～44cmを測る。溝掘方の南側、西側は、削平を受けている。溝底面には浅い凹凸が認められ、概ね溝の向きに並行した帯状となる。溝底面北東際には幅0.3m程度の小規模な溝状の掘り込み(以下、小溝と呼称)がある。小溝の掘方の断面形は逆台形を呈する。小溝の埋土(④層)はロームブロック主体で締まりが強く、掘方の壁面、底面にかけては著しく硬化していた。小溝以外の底面にも、範囲を明示できるほどではないが若干硬化が認められる箇所があり、このことを重視すれば道路遺構の可能性はある。その場合、先述した底面の浅い帯状の凹凸は轍の痕跡ともとれる。ただ、小溝は底面レベルが他と比較し深いこと、整然とした掘方を持つことから轍とはし難い。道路側溝の可能性も考えられるが、対となる小溝が検出されておらず判然としない。他に道路遺構とする積極的な根拠に欠けるため、ここでは溝として報告することとした。

遺物は黒曜石製石器が出土したが、本遺構との明確な関連性は不明である。

2 土坑

SK1(第13図、PL.9)

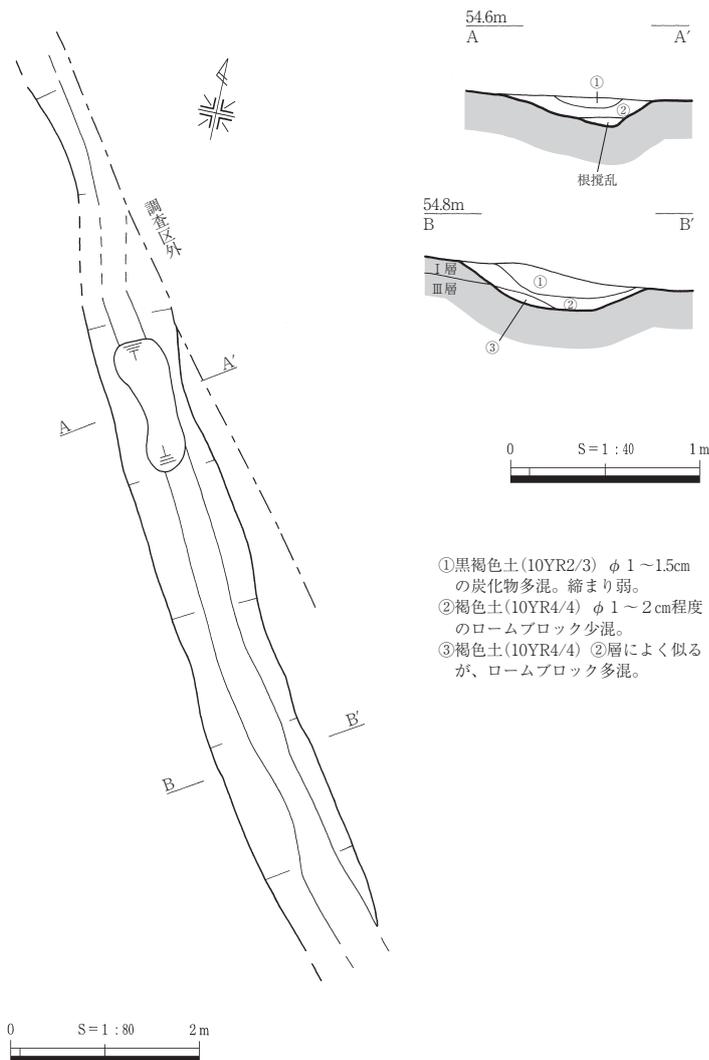
1区I3グリッド、標高55.3mに位置する。周辺はa層の遺存状態が悪く、I層上面での検出となった。掘り込み面がa層上面かa層下かは不明である。

平面形は直径2.1mの歪な円形である。検出面からの深さは最大4cmを測る。

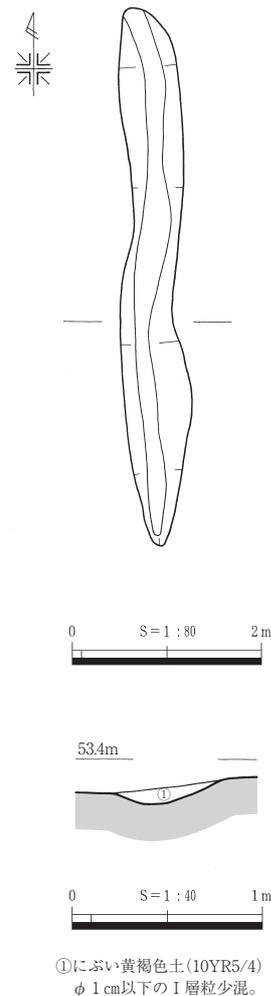
遺物は黒曜石製石器、縄文土器細片が出土したが、これらは周囲からの流れ込みの可能性があり、遺構の時期を示すものとは断定できない。遺構の性格も不明である。

SK2(第14図、PL.9・10)

1区G3グリッド、標高54.8mの尾根上に位置する。a層下、I層上面で検出した。



第10図 SD2



第11図 SD3

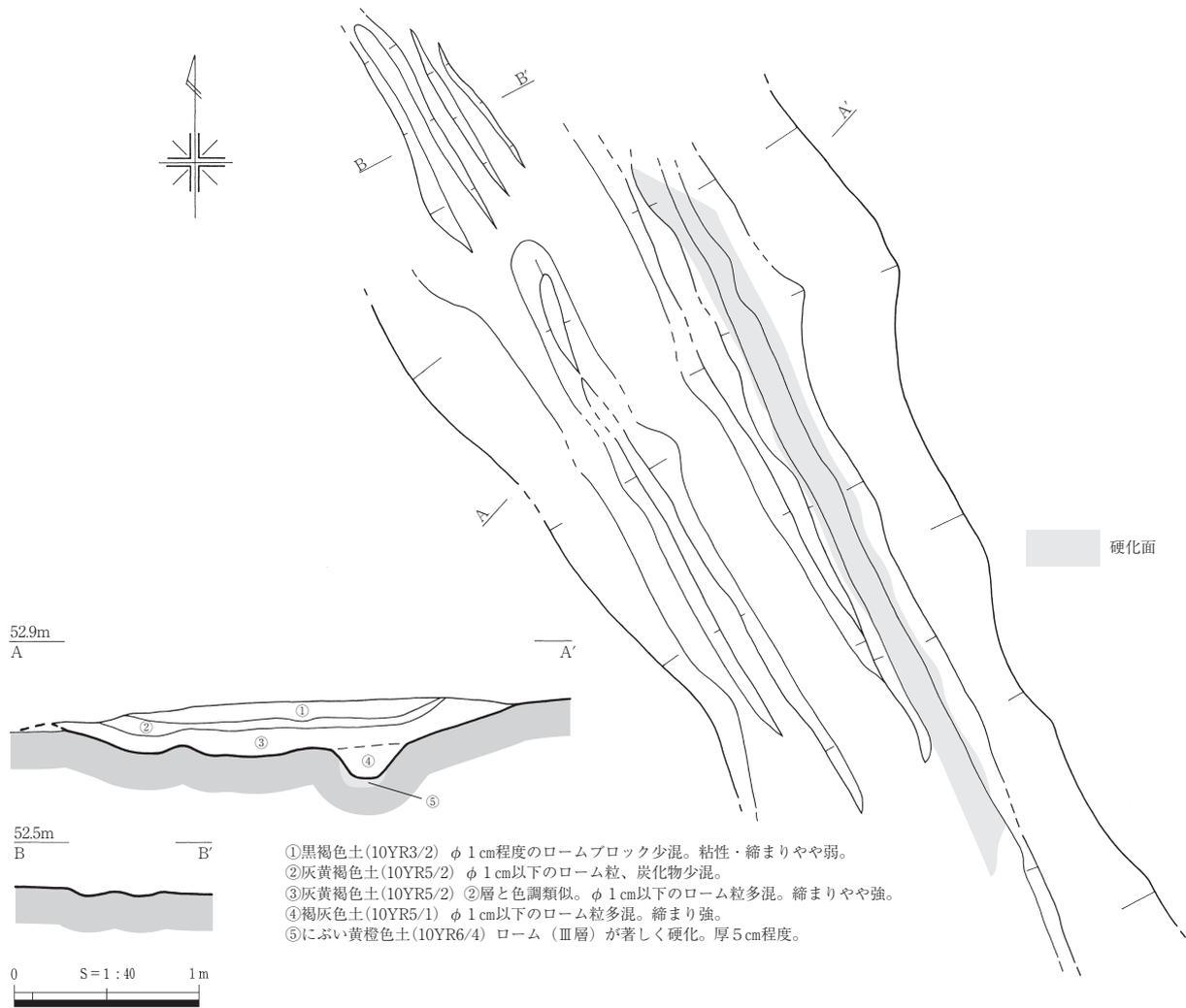
平面形は長軸1.9m、短軸0.96mの楕円形。検出面からの深さは約9cmを測り、浅い播鉢状を呈す。埋土は単層で、炭化材と少量の焼土塊を含む。遺構底面・壁面に被熱痕跡は認められないため、製炭土坑とは考え難い。他に埋土中からは黒曜石・硬質安山岩製石器や磨製石斧(S290)が出土している。底面付近検出の炭化材を採取し、放射性炭素年代測定を実施したところ、8世紀後半～10世紀後半、特に9世紀後半～10世紀後半の可能性が高いとの結果を得た(第4節2参照)。a層下検出という点を考慮すれば、この結果とは齟齬が生じる。底面付近検出の炭化材とはいえ、浅い土坑でもあり上位からの混入の可能性も否定できないため、この結果には注意を要する。

SK3 (第15図、PL.10)

1区E5グリッド、標高52.8m付近の斜面地に位置する。表土下、I層上面で検出した。平面形は長軸1.3m、短軸1mの歪な円形である。検出面からの深さは最大28cmで播鉢状を呈す。遺物は出土せず、遺構の時期及び性格は不明である。

SK4 (第16図、PL.10・11)

1区F3グリッド、標高54.5mの尾根上に位置する。表土下、I層上面で検出した。平面形は長軸1.5m、短軸1.25mの楕円形である。検出面からの深さ22cmの播鉢状を呈す。埋土は炭粒を含んだ黒褐色・暗褐色土層を主体とし、底面付近に褐色土がわずかに堆積する。底面



第12図 SD4

や壁面に被熱の痕跡は認められず遺構の性格は不明である。

遺物は埋土中より黒曜石製石器を確認したが、遺構との関連性が窺えるものは出土していない。

なお、②層検出炭化材の放射性炭素年代測定を実施し、8世紀後半～9世紀末との結果を得ている(第4節2参照)。

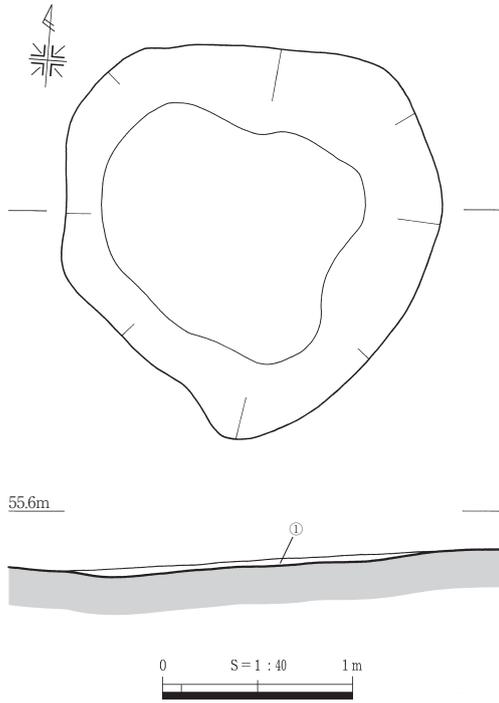
3 ピット(第17図、PL.11)

1区G3・H3・I3グリッドにおいて、ピットを10基確認した。全てI層上面で検出したが、掘り込み面がa層上面かa層下かは把握できていない。柱痕跡は確認されず、ピット配置には規格性は見い出せない。遺物はP2・4・10から黒曜石製石器、P10からは縄文土器小片が出土しているが、ピットに伴うものかは判然としない。

4 道路遺構(第18図、PL.13)

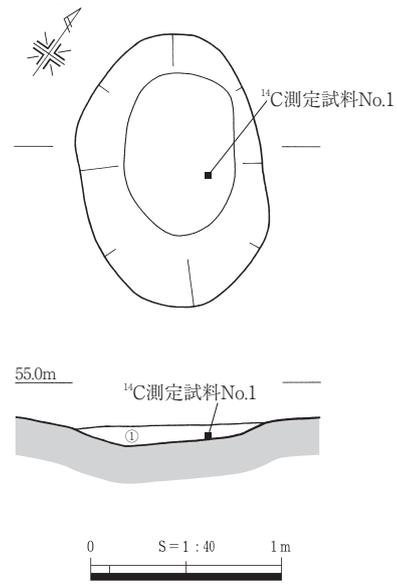
2区C3・C4・D3・D4グリッドに位置し、標高は約53mである。表土下、I層上面で検出した。南東から北西方向に幅0.2～1m程度の浅い溝状の落ち込みが並行し、その内外に帯状の硬化面を併せて確認したことから、道路遺構の可能性を考えた。

溝状の落ち込みは平面不定形で、底面は凹凸が目立つことから人為的な所作によるものとは考え難



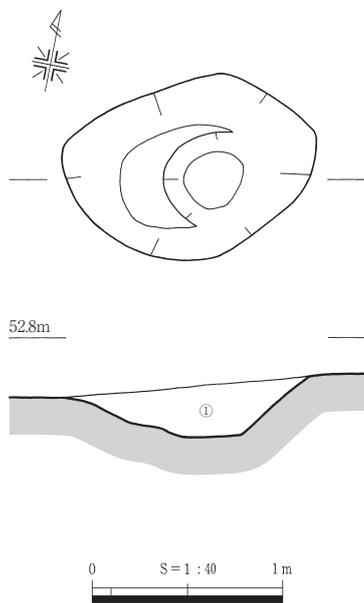
①暗褐色土(10YR3/4) φ 1cm程度のロームブロック多混。

第13図 SK1



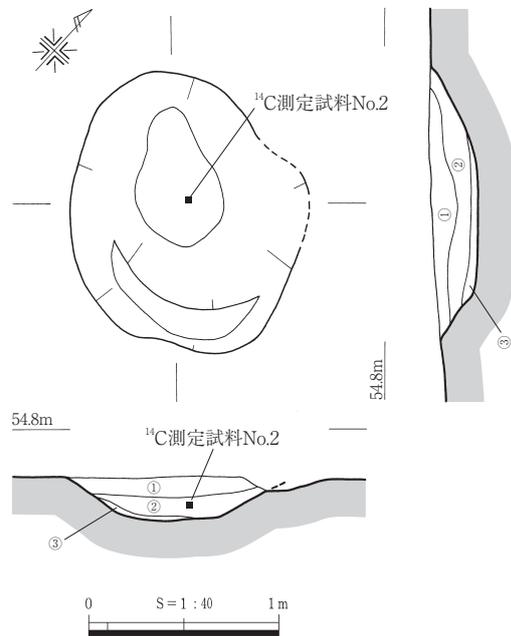
①暗褐色土(10YR3/3) φ 1cm程度のロームブロック少混。5cm以下の炭化材多混。φ 1.5cm程度の焼土塊少混。

第14図 SK2



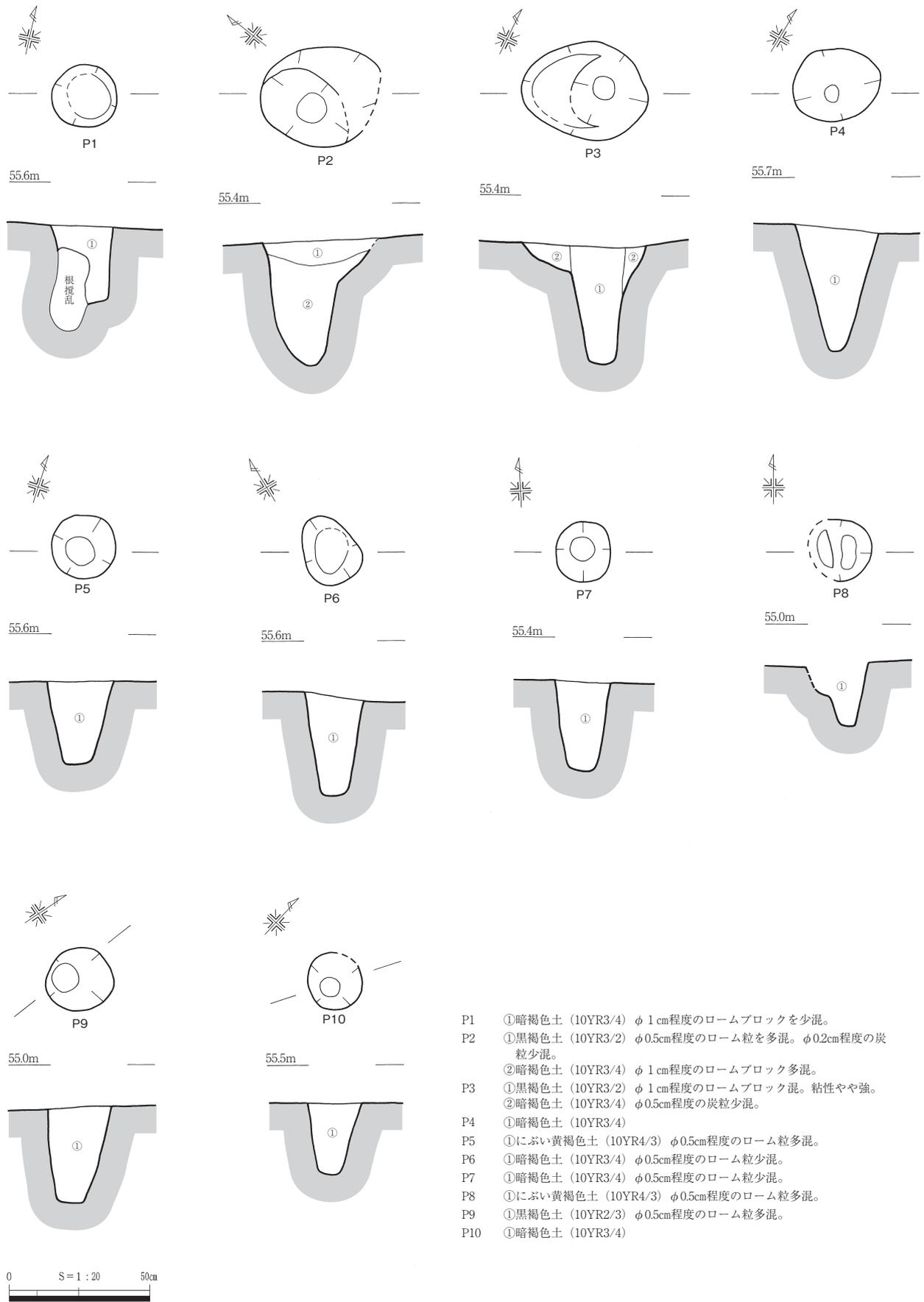
①灰黄褐色土(10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒多混。

第15図 SK3

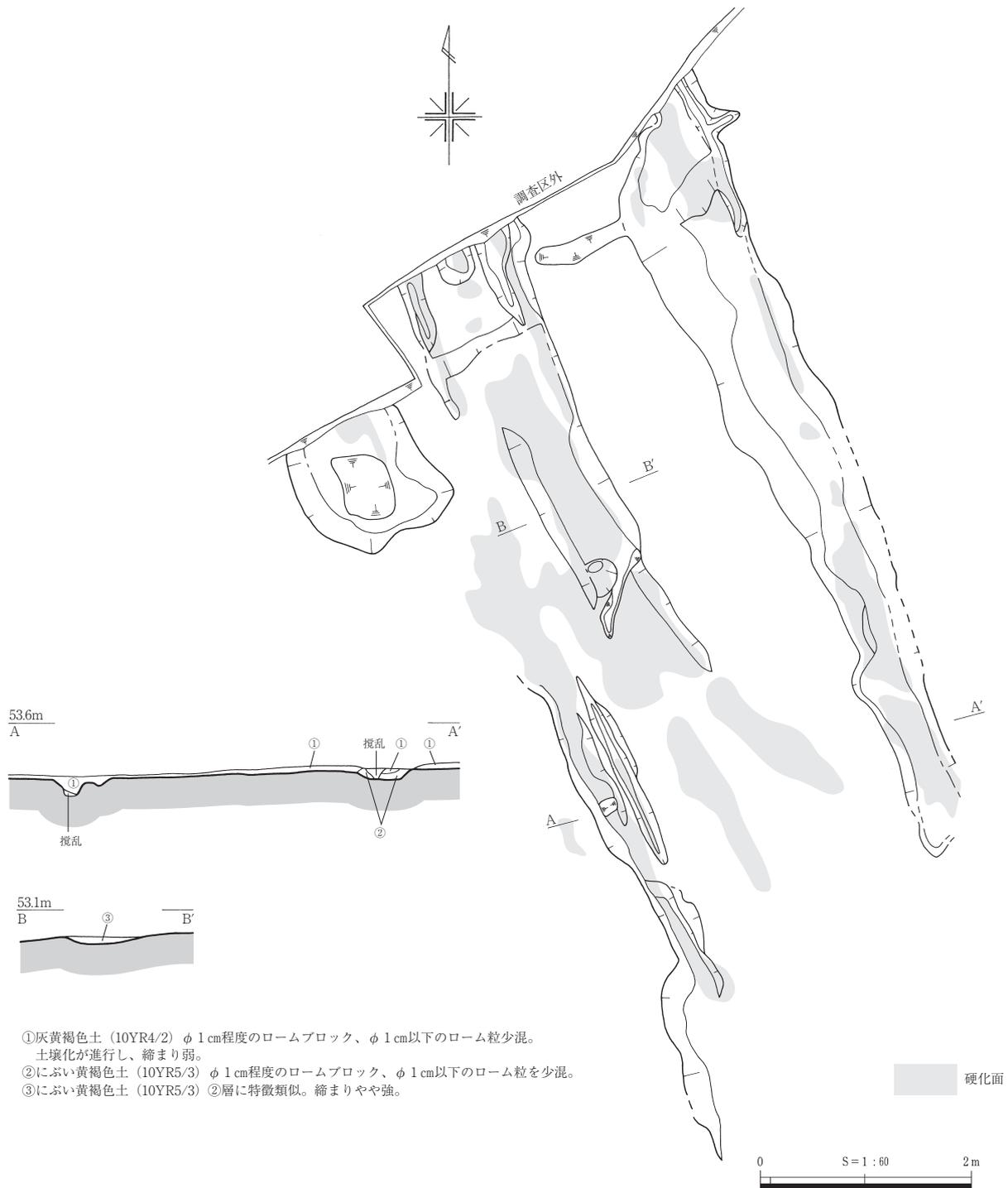


①暗褐色土(10YR3/3) φ 1cm以下のローム粒、炭粒混。
 ②黒褐色土(10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒、炭粒多混。
 φ 1~3cmの炭化材少混。粘性やや弱。
 ③褐色(10YR4/4) φ 1cm以下のローム粒多混。粘性やや弱。

第16図 SK4



第17図 P1～P10



第18図 道路遺構

い。特に北西側は0.2m程度の細い落ち込みが並行し、硬化面の位置も概ね重なることから、轍の可能性が高い。轍の痕跡とした場合、対の可能性のある溝状落ち込み及び硬化範囲の幅から推測すると、狭くみて1m、広くみて2m程度の幅を持っていたと考える。地元の方の話によると、この付近は戦後頃まで伐木運搬用の馬車が通行していたとのことである。このことは調査の所見と概ね符合し、その蓋然性は高いと判断できる。このことから馬車の車輪幅を想定した場合、伐木運搬で幅1mだと狭過ぎるため、2m程度と考えるのが妥当であろう。

本遺構からの出土遺物は無く、帰属する時期は不明だが、少なくとも戦後を下限とする新しい時期に属すると考えられる。